

# 平成29年度 青少年問題調査研究会 第1回議事録

日 時：平成29年8月21日（月）14:00～16:00

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付青少年企画担当

○司会 さて、今回の研究会でございますが、「子供の孤立に向き合う～コミュニティユースワーカーの取組～」というテーマで進めてまいります。子供・若者の社会的な成長を支えて、彼らが自立していく上での重要なことの1つに、人とのつながりがあるかと思っております。

今年の7月に発行しました平成29年版「子供・若者白書」では、第1章に「若者にとっての人とのつながり」というテーマで特集を組んでおります。その内容を少し御紹介させていただきます。

まず、家庭、学校、地域の幾つかの場所を想定しまして、それぞれの場が自分にとっての居場所かどうかについて、また、家族、学校の友人、職場関係の人、地域の人などの対象ごとに、どのようにつながりがあるのか、つながっていると感じているのかということに関しまして、全国の15歳から29歳までの男女にアンケート調査を実施し、6,000人の方から回答を得ました。その結果を踏まえて考察しております。

詳細は白書を御覧いただければと思いますが、例えば家庭を居場所と感じている人たちは約8割という高い数字でしたが、学校や職場、地域を居場所と感じている人は半数程度になっている。また、職場や地域の人と強いつながりを感じていると答えた人は3割以下という結果でございました。特に、現在仕事をしていない無業の人は、家族、友人、地域の人などのあらゆるカテゴリーの人に、悩みを相談できる人がいないと感じている割合が高い傾向であるということがわかりました。周りとのつながりの強さを余り感じていない人は、自分の周りに頼れる人がいなくて孤立する可能性が高いのではないかとということが示唆されてございます。

今回は、このような問題意識のもとで、子供の孤立をめぐって、学校でも家族でも先生でも専門家でもない、そういう存在として、孤立した子供とじっくり向き合って、信頼関係を築いていくコミュニティユースワーカーの育成に取り組むNPO法人PIECESの皆様からの報告をいただきまして、子供の孤立を防ぐ手だてについて考察していきたいということでございます。

それでは、講師を御紹介します。

児童精神科医、NPO法人PIECES代表理事の小澤いぶきさんです。

○小澤氏 よろしく申し上げます。

○司会 続いて、PIECES副代表の荒井佑介さんです。

○荒井氏 お願いいたします。

○司会 続いて、コミュニティユースワーカー、中村朋也さんです。

○中村氏 よろしく申し上げます。

○司会 最後に、同じくコミュニティユースワーカーの大畑麻衣花さんです。

○大畑氏 よろしく申し上げます。

○司会 本日の流れですが、最初に小澤さんから「NPO法人PIECESの活動について」というテーマで30分程度、続いて、荒井さん、中村さん、大畑さんから「高校生支援の現状とア

プローチ」、「高校生支援実践報告」とのテーマで50分程度お話をいただきます。その後、10分程度の休憩を挟みまして、4時までの残りの30分、お集まりの皆様との意見交換、質疑応答をできればと思っております。

それでは、どうぞよろしく願いいたします。

早速ですが、最初に小澤さんからお話をいただきます。どうぞよろしく願いいたします。

## 「NPO法人PIECESの活動について」

NPO法人PIECES代表理事 小澤 いぶき氏

皆さん、初めまして。小澤と申します。

私はNPO法人PIECESを代表している小澤と申しまして、今日は副代表の荒井とコミュニティユースワーカー1期生の中村と2期生の大畑と一緒に参りました。後でそれぞれから自己紹介をと思っています。

PIECESの説明をする前に、何でPIECESを立ち上げるようになったのかを1、2分で御紹介させていただきたいと思っています。

私自身は、もともと成人の精神科を経て専門医を取った後、児童精神科医としてずっと臨床に携わってきて、その後、地方の行政に入って、精神保健福祉センターというところで困難家族と関わったり、予防を行ってきました。実際に児童精神科医療をやっていると、困難が積み重なって孤立した御家族とか子供に出会うことがとても多かったのです。医療というのは、誰かが気づいて如何に早く来られるかが重要で、困難が積み重なって孤立して、下手をするとそれが自殺という形だったり、虐待死という形でしか出会えないということがあって、実際にその前にもっと何かできないかというのを医療にいる中で感じていました。

同時に、生まれた環境が少ししんどい状況だったとしても何とか生きていく子供たちを見ていると、子供たちの日常に、親御さんでもない、ちゃんと理解してくれる他者という存在が必ずいたのです。そういった存在が全ての子供たちの周りにいたら、子供たちは孤立せずに何とか生きていくのではないかなという思いがあって、荒井と一緒にこのNPOを立ち上げたという経緯があります。

今日の流れを御説明させていただきます。

最初に私からNPO法人PIECESの活動紹介をさせていただきます。その後、PIECESは子供たちの孤立をなくしていくという取り組みをしているのですけれども、年齢はかなり幅広いのです。特に今日はその中でも、より孤立しやすくなっていく年代、高校生年代のところにどんな課題があって何をしているかといったところを荒井から、より具体的なところをコミュニティユースワーカーの2人からお話しさせていただこうと思っています。

最初に私からNPO法人PIECESの説明をさせていただきます。

私たちの団体は、どんな子供も尊厳を持って豊かに生きていける社会というのをビジョンに活動しています。そのためのミッションとして、子供たちが孤立しない仕組みをつくるということを掲げています。孤立しないためには、どんな子供にとってもちゃんと信頼できる他者がいることが必要なのではないかと思っていて、信頼できる他者を増やすこと。もう一つは、例えば子供が学校に行かなくなってしまったとか、10代で妊娠したりしたときに、それでも何とかなるよという、そういった代替案が実装されている社会というのはすごく大事なのではないかと思っていて、そういった社会の受容性を高めていくこと。こ

の2つがすごく大事になってくるのではないかと思っ、孤立しない仕組みをつくるために信頼できる他者を増やすこと、社会の受容性を高めることを活動としてやっております。

そのための指標として、そもそも孤立している子というのはどのくらいいるかというのはまだ調査されていないのです。なぜかという、経済的困窮の観点で線を引くと調査が可能だったり、虐待相談対応として上がってきている件数とかでみると調査が可能な数値が出てくるものの、過去、実際に関係性がないとか、頼ることができないみたいな見えないものを数えるというのはとても難しく、それをちゃんと可視化して、それに一番いい方法とは何かを示していかないと孤立がなくなるのではないかと思っているので、この孤立調査事業に取り組もうとしています。

もう一つが、今日お話しさせていただくコミュニティユースワーカー育成事業です。これは、子供にとっての信頼できる他者を増やすという解決策の1つとして、行政とか地域と連携して、孤立した子供たちに伴走しながら子供たちの日常を一緒につくっていくような人を育成しています。

もう一つが、会員コミュニティ事業。子供たちは、信頼できる誰かと出会った後に、ほかの大人との関係の中で自分の世界を広げていくのです。そういった自分ができることの関わりを持ち寄りながら子供を支える大人たちをつくっていかねばいけなくて、そういった人たちを増やす事業としてこれから取り組もうとしています。

この3つの事業を柱に、今、PIECESは活動をしています。

私たちはどんな課題に取り組んでいるかということ、子供の孤立という課題に取り組んでいます。例えば、相対的貧困が7人に1人というのが最近出たかと思うのです。ちょうどこの前、昨年度の虐待相談対応件数が12万2,500件という速報がありました。その中でも、実の家庭で育っていない子供というのが4万6,000人ぐらいいます。この前、厚労省が乳幼児期を施設養護から里親養護に変えていくとか、一時保護所を変えていくといった指針を出しましたが、施設の中でもしんどい思いをしている子とか、施設に行く前の段階で一時保護されずにずっと親のもとで心理的虐待を受けながら生き延びている子というのは暗数としてはとても多いのです。なので、ここに載っていない数値の子たちが実はたくさんいたりします。

小・中学生で学校に行っていない子供というのが12万人います。こうやって健在化されている課題があるのですけれども、そういったところにどれも共通しているのが、子供たちが誰にも頼れないとか、子供たちにとって安心できる関係がないといった孤立という課題なのです。この一つ一つをちゃんと解決していくというのがとても大事なのですけれども、同時に、そもそも子供が孤立しない状態をつくっていかないと、恐らく、子供たちを取り巻く課題は生まれ続けるのではないかと考えて、孤立という課題に取り組んでいます。

私たちは、子供の孤立というのは3つあると定義しています。この図はちょっとわかりにくいかもしれませんが、1つ目が家庭での孤立です。

日本の場合、孤立が見えづらいのは、家に親御さんがいても孤立しているという現状が

すごくあるのです。例えば、家の中で、親御さんに精神疾患があったりして養育ができないとか、子供に構う時間がない、関心を向けられないという現状があって、子供は親にとって安心な人ではない状況というのはもう孤立している状況なのです。そういった孤立している状況の中で、子供は親との関係の中で育んでいく安心できる関係とか、誰かとのいい関わりをつくるといったことを学ばずに成長していくと、学校に入ったときに、友達といい関係をつくるのが難しくなって、結果、いじめの対象になってしまうことがあります。そのほかにも発達特性があって、学校でうまくなじめなかったりして孤立することもあるって、家庭での孤立が学校での孤立に結びつく事例と、そもそもの特性と環境がマッチしなくて学校での孤立に結びつく事例があります。

家庭で助けてもらって何とかなったという体験をしていない子供というのは、学校に行ったときに困っていても、助けてと言えないのです。そこに先生がいたとしても。誰にも助けてもらえなくて学校でも孤立していくことがあります。

そういった2つで孤立していったときに、それを地域で支える人たちがいなければ、地域で手を差し伸べてくれる大人とか、子供たちのことを理解してくれる、ちゃんと構ってくれる大人がいないとき、子供は完全に孤立してしまうのです。なので、家庭とか学校で孤立しにくくするというのは、地域支援をもう一回再構築するとか、地域の中で支える大人を増やしていくことがとても大事なのではないかと感じています。

実際に私が医療で関わっていた女の子の例なのですけれども、彼女はお母さんのうつ病で養育が困難だったのですね。さらに発達の特長もあって、人と関わるのがもともと苦手な女の子でした。家にいても誰も構ってもらえない。小学校に行ってひどいいじめに遭ったのですね。ただ、彼女は親にそれを相談して何とかなったという体験がなかったもので、誰にも言えない中、学校に行こうとするとパニックになって泣きわめいて、何も知らない親御さんは無理やり学校に連れていこうとした。そこで学校に行って、いじめられて、誰も信じられない、もう死にたいという思いがずっと強くなっていた女の子だったのです。

彼女が死にたいと言ってくれたことで医療につながれたのですけれども、実際に彼女に出会ったときにはもう死ぬことしか考えていなくて、彼女自身が明日が来るのが怖いと。誰にも相談できないという話をしていく中で、その子は実際に私たちが育成していたコミュニティユースワーカーと出会って、自分のことにちゃんと耳を傾けてくれる人がいるとか、自分は友達に頑張ってる話しかけたら無視されてしまったという体験があったけれども、自分が話したら、その話をすごくおもしろがってくれる大人がいるという中で、ちょっとずつ自信を回復して行って、今、学校に行き出しているのです。彼女もずっと家にお母さんがいるから、わからない中で孤立していて、学校でも、来ているから大丈夫だと先生は思っていたけれども、自分の心の中では死にたいという気持ちをずっと抱えながら生きてきたということがありました。孤立すればするほど子供たちは頼れなくなっていくのですね。なので、その前に何とかしていく必要があると感じています。

実際にどうして孤立していくのか、孤立するとどうなるのかといったところをちょっと

お話しさせていただきます。

例えば、家庭で孤立するというのは、子供たちにとっては人から大事にされた体験がない状況なのです。私たちは人から大事にされて初めて自分を大事にできたり、誰かを大事にできたりするのです。自分を大事にすることの1つは、困ったときに相談するというスキルなのですけれども、そういったことを学んでいないと、誰かに助けを求めて助けを受け入れることができないまま、困難を自分で抱え込んでいかなければならなくなります。人からの助けを求められない、人に助けてと言えない中で、さらに誰にも助けてもらえない中で、人とか社会への不信感を募らせていってより深く孤立するというループが生まれやすくなっていきます。なので、孤立というのは誰にも頼れない状況だと私たちは定義しています。

皆さん、困ったときに、ちょっと相談できるとか、ねえ、ねえ、聞いてと言える人が身近にいらっしゃる方はいますか。

(挙手する者あり)

いますね。実は、ねえ、ちょっとさーと相談できるというのはすごく主体的な行為なのです。頼むというのはとても主体的な行為で、まず、困っているから何とかしたいという思いがないと相談しないのです。誰かとの関係において相談してうまくいった経験があったり、そこにちゃんと相談できる関係があるから相談できるのです。頼れないというのは、そもそも生きる気力をなくしている人だったり、主体性を奪われている人だったり、相談できるいい関係が一切ない人だったり。そういった子供たちにとって、相談するというのはハードルがとても高いので、相談していいんだよとどれだけ啓蒙しても相談というのはなかなかできないのです。頼ることができない状況というのは実は私たち大人が作り出しているのではないかと思っていて、頼れる大人になるとか、頼れる環境をつくっていくことがまずすごく大事になってきます。

自傷の研究をしている松本俊彦先生が、最大の自傷は援助希求しないことだ、一番の自傷というのは助けを求めないことだと言っているくらい、助けを求められなくなった状態というのは生きていくことが苦しくなっている状況でもあると考えていただけたらいいかなと思います。

実はイギリスに、例えば高齢者の孤立だったり、高齢者の疾病を加速するのを防ぐのに、社会の人とかインフォーマルなコミュニティを処方するといった社会処方箋という考え方があるのです。例えば孤立もそうですし、貧困もそうなのですけれども、医者が診断して薬を出しても治らないですね。そこに必要な処方箋というのは、信頼できる人だったり、その人が安心していられるコミュニティだったりします。そういった処方箋をちゃんと新しくつくっていく必要が子供の文脈でもあるのではないかと私たちは考えています。

その社会処方箋というのは高齢者の文脈でしか一般化はしていなくて、子供の文脈で、社会の処方箋として孤立への処方箋をつくっていくといった動きをきちんとしていくことが必要なのではないかというのを医療にいますごく感じました。

では、PIECESは孤立した子供に対してどんな処方箋を考えているかというのをちょっとお話しさせていただきます。

そもそも何で孤立するかというと、私たちは社会的な動物で関係性の中で生きているので、誰かとの関係性を築くのがすごく難しくなったり、関係性がなくなるとすごく孤立しやすくなるのです。関係性を築くというところをつくる土台というのは実は子供時代にあります。

まず、オギャーと産まれて1歳ぐらいまでの間というのは愛情形成をする時代と言われていて、自分が信頼できる養育者、自分が一番身近な養育者との間で、おむつがぬれて泣いたらかえてくれる、この人だったら、怖いよーと言ったら安心できる環境をくれるのだ、そういった人との安心できる関係を通して、人というのはそのほかの人との安心できる関係をつくっていく土台をつくるのです。

でも、この時期に、例えば虐待があったり、親御さんが精神疾患だったり、若年妊娠をして親御さん自身がまだとても未熟でお金もない状況で困窮していたり、DVがあったり、そういった状況があると、誰かとの安心できる関係が築きにくくなって、その後の人との関係づくりにすごく影響が出ると言われています。それで、より危機に陥りやすくなります。

今の時代は、どの環境をとっても、学校に行けなくなったら孤立しやすくなるというふうに、孤立しやすい環境というのはとても起こりやすくなっているのですけれども、もう一つ、危機の起こりやすい時期として思春期・青年期があります。

私たちが社会の中で自分とは何者かとか、自分の役割を見出していくアイデンティティを形成するこの時期というのは、私たちは親御さん以外の他者社会の誰かとの関係の中で自分の役割とか自分の居場所をつくっていきます。例えば、このときに社会の関係、友達という関係の中でひどいいじめに遭ったり、生活がすごく困窮してお金がなくなって中退せざるを得なくなったり、若年妊娠があって一気に環境が変わって周りとの関係が途絶えてしまったりすると、これまでの関係が途絶えて社会の中での居場所がなくなってしまうのです。そこでまたもう一回新しく居場所をつくり直してアイデンティティを形成するといったときにすごくたくさんの関係が必要になるのですけれども、それがないと人というのは危機に陥って孤立しやすくなります。

この危機に陥ったときに、例えば家族が機能していなくて支えられなくても、学校の先生とうまくいってなくても、もう一つ、社会の中にそれを支えてくれる他者とか、何とかなるような代替機能みたいなものがないと孤立してしまうので、私たちはそういった子供たちにすごくいいつながりを提供する、いい居場所を提供することをもって孤立を予防していくことを行っています。

具体的にこういった孤立している子供というのは、今、調査中なので、まだちゃんとした数値は出せていないのですけれども、大阪のスクールソーシャルワーカーをやっている山野先生が出した調査だと、潜在的に孤立し得る層というのは子育て世代の30%ぐらい



るという調査が出ていて700万世帯ぐらいになるのです。潜在的層を含めるとかなり多い層になるのではないかと考えています。

完全に孤立して困難が積み重なった層、治療が必要な層というのは、多分、医療とか児童相談所がケアするという形で関わっていかねばいけないのですね。逆に、孤立の中から関係が生まれて、何とか自分でチャレンジしようという意欲が生まれたり、勉強したいという意欲が生まれてきた子供というのは、例えば、今ある学習支援だったり、そういったところに乗りやすくなるのです。ただ孤立していて誰ともいい関係を結べていない子供というのは、そもそも意欲がなくなっていて、何かしようと思う気持ちがないので、学習支援に行ったとしてもこぼれやすくなるのです。意欲がないので、今、そういった子たちへの処方箋というのがなくて、その子たちが誰かとのいい関係の中でもう一回意欲を育み直して、人というのは信頼していいのだとか、社会というのは信頼していいのだという中で、自分で挑戦して、自分で自分の道を選べるというところまでをつくるというのをきちんと誰かとの信頼関係をつくる場所で行っていく必要があるのではないかとというのがコミュニティユースワーカーの取り組みになります。

具体的に私たちは、孤立している子供と出会ってから、その子たちが安心できる大人をコミュニティユースワーカーとして出会えるような取り組みをしています。子供がコミュニティユースワーカー、信頼できる特定の大人と出会う中で、子供たちというのは自分に十分に関心を向けてくれるとか、自分を否定しない、あとは、自分のことをちゃんと信じてくれている、自分の話を聞いてくれているという中で、安心してちょっとずつぼろっと何かを話し出すのですね。こんなことがあったんだよとか、実はうちさーとか、実はさー、彼女がいて妊娠しているんだよとか、人にはなかなか話せないようなことをぼろっと話してくれたり、実はこんなことをやってみたいんだということも話してくれるのです。

そういった中で、これは早くに支援につなげたほうがいいなというときには、行政と連携をして、医療と連携をして支援につなげながら、子供たちがやってみたいなという意欲をうまく引き出して、その後、子供たちにとって、ほかの大人たちと一緒に何かおもしろいことに取り組めるコミュニティをつくっていきます。その中で子供たちは、自分がやってみたいことに取り組みながら、コミュニティユースワーカー以外の大人とのいい関係をつくって行って、たくさん頼り先をつくっていくのです。

子供たちがコミュニティユースワーカーを通してほかの大人との頼り先ができて、自分で自分の道を選べるようになったというプロセスを私たちは自立支援のプロセスと呼んでいて、自立とは子供がたくさんの人に頼れるようになった状態と定義をしています。自立というのは決して一人で何でもできるようになることではなくて、困ったときに誰かに頼りながらもちゃんと生きていけることだと定義して、子供たちがたくさん大人の頼れるようになるまでのプロセスをつくっているのが取り組みになります。

そのためのポイントとしてすごく大事なのが、まず最初の信頼できる大人との関わりなのです。誰も信頼していない子供というのは、急に誰かが向こうからやってきて、これを

やろうよとか、学習しようよと言っても難しく、まずは子供のことを尊重できる関係の中で、信頼して初めてやってみようと思える。この関係がすごく大事なポイントなのではないかと思っています。これを私たちはコミュニティーワーカーと呼んで、育成をしています。

コミュニティーワーカーは子供たちとの信頼関係を構築する。子供たちの困り事とか興味・関心を聞いて、多様な支援とか機会につなげる人のことをコミュニティーワーカーと呼んで育成しています。具体的に何をしているかという、やっていることを言うと、あれっ、そんな当たり前のことと言われるのですが、子供たちの家に実際に行って、子供たちと関わったり、子供たちが好きなことを一緒にする、一緒に御飯を食べる、一緒に折り紙を折る、ゲームをする、そういったところから子供たちの興味を広げています。

何でこういったきっかけが必要なのか。これは全部子供と関わるための1個のツール、道具なのですが、何で必要かという、私たちが日常の中でやっていることというのは、朝起きて、御飯を食べて、仕事に行き、同僚と話して、家族がいる人はまた家族と話すと、人との関わりが営みなのだと思うのです。この人は、また一緒に御飯を食べられる、また来てくれる、否定しない、頼れる人だ、明日も続くのだ、そういった安心できる日常が続くのだというところからしか子供たちはその先を紡げないというか、信頼をしていけなかったりすることが多々あります。なので、まずは安心できる日常をつくるためのツールとして、多様な機会を私たちは設けています。おしゃべりをするスキルだったり、一緒にゲームをする中で子供たちと良い関係をつくるスキルというのをコミュニティーワーカーは学んでいます。

そうやって子供たちの意欲が引き出されて、やってみたいとなったときに、子供たちにとってのいいコミュニティをほかの大人たちとつくって行って、子供たちにとっての新たな居場所をつくっていくのをやっています。実際に、ゲームに興味がある子が外に出られるようになって、ゲームクリエイターさんたちと一緒にゲームをつくり出して、プログラミングを学んでいた、一緒に御飯を食べていた子が料理をつくってみたいと言って自分が大人に料理を振る舞うような機会を提供し出したり、子供たちが自分たちで逆に何か挑戦し出すといったことが生まれています。

コミュニティーワーカーの役割としては、1つ目が、安心できて何でも話せる関係をつくること、2つ目が、困り事や興味や関心を聞いて多様な支援につなげることです。この安心できる関係というのは、実は専門家みたいに困難を解決するよとか、支援をするよという関係では難しく、本当にフラットな、友達ではないけれども、友達と近い新たな関係を見出していく必要があって、支援をしない、一緒に何かを楽しむ関係というのは子供たちがとても安心できる関係になっています。

私たちは、その後に子供たちから出てきたニーズを、例えば行政の支援機関につないだり、ほかの大人とのコミュニティにつないだり、機関につないだり、ほかのNPOにつないだり

りということをやっています。コミュニティユースワーカーはどのようにして子供と出会うかという、行政機関の中の例えばスクールソーシャルワーカーさんとか、こども家庭支援センターといった支援機関ですね。そこから子供を紹介されたり、地域の人から子供を紹介されたり、学習支援をやっているNPOからうちでは見られませんが紹介されたり、子ども食堂をやっている人からちょっと心配なんだけどと言って紹介されたり、妊娠のことをやっている人たちから、こんな子がいるんだけどと言って紹介されたりします。

もう一つが、子供たちが子供たちを呼んできてくれるという紹介の仕方もあります。それは後で荒井から詳しく説明があります。

その中で、コミュニティユースワーカーと出会いながら、時間とか場所とか機会とかお金の提供を企業とか市民の人たちとつくっていく、地域の人たちとつくっていくというのをやっています。

どんなプロジェクトがコミュニティユースワーカーとして生まれたかという、これは、学校に行っていない子たちがここに来ているのですけれども、ゲームクリエイターさんたちとのコラボによって生まれた場所です。学校に行っていないで、でも、ゲームは興味がある子がゲームを通してこの場所につながって、みんなでゲームをつくらうというプロジェクトが立ち上がったのです。ストーリーが得意な子、絵を描くのが得意な子、プログラミングをやりたい子が一緒になってプロのクリエイターたちと新しいゲームを生み出すというところで、今、このイベントが行われています。

そこで何が起きているかという、人に興味がなかったり、人に不信感を持っていた子がそういった共同作業の中でほかの子と仲よくなったり、みずから違う役割を買って出たり、そこに自分の役割があるからこそ、学校には行けていないけれども、この場には来たいという子がいたり、私のストーリーがないとゲームが進まないからと言ってこの場には来るといった子たちがすごく多くいます。

ここは、今やっている中で、高校の、10代で虐待を受けた女の子たちというのは、男性との関係の中で妊娠をして中退せざるを得なくなるというのがすごく多くあって、そういった中で10代のシングルマザーをサポートして、一緒に子育てをしながら、その子たちがキャリアを諦めなくて済むように高卒認定のサポートをしたり、進路サポートをするといったものをつくっています。

これは、大人も子供も一緒に楽しもうという場所をつくる中で、支援されるのがすごく苦手な子たちがスポーツをしたいと言ってきて、そこから子供が子供を呼んで、エネルギーがあり余ることで、結果、悪さをしてしまう子たちがここでつながったりとかしています。

学校に行っていない子たちの家を訪問して、サポートしたり、学校に行けなくなって中退した子たちの高卒認定のサポートをしているといったように、コミュニティユースワーカーが一人一人の子どもたちと出会ったからこそ生まれたプロジェクトというのが、今、生まれています。

これは「子どもをひとりぼっちにしないプロジェクト」として、キャンプファイヤーのサイトの中に掲載されているプロジェクトが幾つかあるので、ぜひ見ていただけたらと思います。

私たちは1年間やってきて、コミュニティユースワーカーが、今、16名育成されています。豊島区と足立区と板橋区で活動してきて、実数として230人の子供に関わってきました。今、プロジェクトが9カ所。これは、ほかの大人を巻き込んでの、子供たちが安心して来られるような居場所とか、子供たちがチャレンジできるような居場所というのが、今、9カ所でできています。

去年5月に募集して半年間育成した1期生の人たちが、今、8人います。半分が学生で、半分が社会人。今、ちょうど2期生が終わって、3期生を募集して、9月から3期生がスタートします。特に3期生から重点的にやっていこうとしているのが幼児期・学童期のところです。もう一つが高校生から若者の課題です。乳・幼児期というのは、子供は親を通してしか社会につながれないのですごく孤立しやすいのです。ここを、妊娠期のことをやっている人とか、子ども家庭支援センターとか児相とかと連携しながら、より早くから孤立を防げるように、一時保護にもなかなかつながらないような子供たちを親だけで育てなくていい仕組みだったり、夜の児童館みたいな形のものを作って生活を支えていくというものをやろうとしています。

もう一つは、高校生というのは中学校から高校に上がる時点で支援が途切れやすくなるのです。区から都に体制が移っていってしまうのもあります。児相もそうですし、スクールソーシャルワーカーさんも高校生のところで途切れてしまうので、そこで支援が途切れて孤立しないように、もうちょっと前の中学生からつながりながら、高校生、若者のところでドロップアウトしないように、しにくいような支える体制を今ちょうどつくっていています。ここも後で詳しく説明をさせていただきます。

これまで8名ずつ育成してきたコミュニティユースワーカーなのですけれども、より広く育成できる体制が整ったので、3期生からは、コミュニティユースワーカーの研修生を20名、コーディネーターを6名募集して育成をしていきます。

コミュニティユースワーカーをどんなふうに育成しているか、簡単に御説明させていただきます。

私たちコミュニティユースワーカーには、価値観とスキルと知識というのを持ってもらうような育成をしていて、特に価値観ですね。自分がこうすべき、学校に行くべきなのだから、こうすべきだという価値観を押しつけたら、子供というのはあつという間に関係が途切れてしまうのですね。なので、自分はどんな価値観を持っていて、子供はどんな価値観を持っていて、子供に価値観を押しつけずに、まずは子供とどんな関係をつくっていったらいいかというのを徹底的に学んでいきます。そのために、実践と理論を意識しながらチームで学べる体制をつくっていています。自分のコミュニケーションや価値観の偏りに気づける、実践からちゃんと学び続ける姿勢とかスキルを身につけるといったところを徹底的

に学ぶのがこのプログラムになっています。

これは、経験学習理論に基づいて、人というのはインプットをただ受けても実践には結びつかなくて、実践をしながらリフレクションをして、気づいたときに適切なインプットを受けたときにすごく成長すると言われていたのです。それに基づいて、子供たちと関わりながら技術を獲得して、月2回のゼミの中で自分たちの関わりを徹底的にリフレクションして、どうしたらいいかというのをチームで学んで、さらに座学として、私たちだけではなくて外部の専門家たちと一緒に作った知識をきちんと伝えていくといったことをやっています。これをかなり細かく徹底して4カ月やって、その後、実践に行くといったプログラムになっています。

リフレクションというのはどうやるかということ、子供との関わりの実践をちゃんと記録してもらおうのです。記録することで自分の関わりを離れて見られるという客観性を持てます。その記録をもとにみんなで振り返って、本当にその関わりがよかったのかとか、子供は本当は何を願っていたのかという子供の奥にある欲求みたいところをちゃんとリフレクションして、自分は何でそんな関わりをしたのかとか、何でうまくいったのか、何でうまくいかなかったのか、では、次はどうしたらいいかというのをリフレクションしながら、みんなが次によりよい行動ができるように知識をちゃんと普遍化していくことをやっています。

この中で私たちは、子供が出す行動だけに惑わされるのではなくて、その奥にある感情とか願いに気づけるというのをすごく大事にしています。例えば、子供が誰かをくそと言ってしまったみたいなこととか、学校が嫌になって抜け出しちゃったんだよと言ったときに、だめじゃんと言ったら関係が途切れて、その子は何でそんな行動をしたのだろう、どんな願いがあったのだろうというふうに子供とコミュニケーションをとっていくと、実は、本当はこんなことをわかってほしかったんだよということが出てくるのですね。そこを中心に関わっていくことが信頼関係を築いていくときの大きなキーになっていて、そこができるようにコミュニティユースワーカーを育成していくといったことを大事にしています。

ここから「高校生支援の現状とアプローチ」を荒井からお話しさせていただきます。

○司会 小澤さん、ありがとうございました。  
では、荒井さん、お願いします。

「高校生支援の現状とアプローチ」  
NPO法人PIECES副代表 荒井 佑介氏

NPO法人PIECESの副代表の荒井と申します。

私の自己紹介を簡単にさせていただくと、私は、10年前ぐらいですか、最初、ホームレス支援をずっとやっていて、新宿だとか渋谷だとか池袋とかにいる路上生活者の人と一緒に寝泊まりとかしていたのです。夜、話していると、みんな幼少期の話とかをしてくれるのです。そうすると、生活困窮の家庭に育ったり、親が障害を持っていたとか、親とか友人と全く縁が切れてしまったとか、そういった人たちが仕事につまずいて、頼れる人もいなくなって路上生活に至ってしまう現状を私は見てきて、6年前ぐらいから子供の貧困支援が少しずつ始まってきた段階で、何でそういった人たちが生まれるのか、もうちょっと前にさかのぼって、どういったことが起きているのかを知りたくて、子供の支援に携わって、すごくはまってしまっていて今に至ります。勤めていた会社もやめて、代表と出会ってこのPIECESを立ち上げたのです。

私はもともと学習支援とかをやっていて、行政が主催するものだったり、地域でやっている学習支援とかに行っていたのですけれども、学習支援に来ている子の中で勉強を進んでやりたい子というのは結構少ない印象があって、さらに、勉強したくないから来なくなってしまったり子とかもいて、私はそうした子を追い駆けるように、学習支援の場以外のところでサポートしたり、そういうことをやっていたら、非行少年とか、家庭にいろいろ問題を抱えた子とか、そういう子たちと結構出会うことになったのです。そういう子たちが誰にも相談できなかつたり、もちろん行政の支援を全く知らなかつたり、親は頼れなかつたり、学校は敵みみたいな感じになっていたり、そういった子たちを支えていく仕組み。中学を卒業して何とか勉強はできても、高校に入っていったときにすぐ中退をしたり、その後、いろいろな課題にぶつかる子たちがたくさんいて、ここをどうにか継続してサポートできる仕組みをつくれなかなというところに私は強く問題意識を感じて、この団体を立ち上げて、特に高校生年代の支援に力を入れてこれまでやってきました。

そこで、私が見てきた事例と、このPIECESを立ち上げて出会ってきた事例を最初に紹介させていただいて、その後に、高校生年代が抱える現状だとか問題だとか、そういったところをちょっと述べた後に、アプローチだとか、今後どのような体制をとっていくかといったところを説明させていただければと思います。

その後に、具体的な活動としてコミュニティユースワーカーの1期生、2期生が来ているので、実際の活動をしゃべっていただこうと思っています。

スライドはないのですけれども、写真とかを使っているので、前の画面をごらんいただければと思います。

私が見てきた事例で、高校を中退したケースです。この子は生活保護家庭で育っています。ひとり親、母子家庭で育って、3人きょうだいで、水道・ガスとかが全部止まって、

ろうそくとかで生活していたり、隣の家から水をもらったりという形で生活をしていたのです。学力は小2でとまっていて、そこから学校の授業は全くわからないような状態。この子は中3の夏に学習支援につながったのですけれども、高校の進学意欲などはほとんどなくて、ここに来て寝ているだけだったのです。そんな子を私はサポートして、何とか勉強の意欲が出てきて、最後1～2カ月ぐらい頑張っでぎりぎり高校に入れた。中学校の先生とかが、おまえ、入れないんじゃないかと言っていた子が何とか高校に入ることはできたのです。

一応高校に入ったのですけれども、すぐ中退をしてしまった。というのは、たばこを吸っているのがばれたとか、暴力事件に巻き込まれたりして、すぐ停学を食らって、単位が足りなくてすぐ中退をしてしまったという形。この子は入ってすぐ中退をしてしまいました。

だいぶ飛んでしまうのですけれども、そこから専門学校に何とか入れることになった。この子は料理の道に進みたいと言っていたので、料理の勉強をして何とか調理師免許を取得した。彼が料理のイベントを主催するような機会、いろいろな大人に自分の料理を振る舞うような機会をつくっていったら、お客さんが、いい会社を知っているから紹介してあげるといので、会社を紹介してくれて、彼は就職できたのです。

ただ、仕事についても、調理の道というのは結構ハードなので、4カ月ぐらいでやめてしまって、親との関係が悪くなったりとかして、逃げるように家を出て、ホストになって、寮に入るという形になりました。

その間、私、ずっとつながっていて、やめるときとかも相談に乗ったり、そういった関係をつくっていてよかったなと思ったのですけれども、彼の家庭環境だとか、いま一步踏ん張ることができなかつたり、そういった感じでホストの道に。ちょうど先々週ぐらいですか、ホスト先で出会った女の子との間に子供を授かって、2人は18歳、19歳でこれから親になるのですけれども、生活もなかなか苦しくて生計が立てられない、今、そんなようなところですよ。子供は産む気でいるので、そこも継続してサポートしていきたいなとは思っているのですけれども、親の協力がなかなか得られなかつたり、置かれている環境はちょっと大変だと思うので、そういったところをサポートしていけたらいいなという1つの事例です。

もう一つは、若年妊娠で出産したケースです。当時私が教えていた子の彼女で、学習支援には全然来ないのであるけれども、その子を通じてつながってはいたのです。あるとき、彼氏から、その当時別れていたのですけれども、どうやら妊娠したらしいという情報を聞いて、何度か連絡をとって会ったら、妊娠をして、高校はいさせてくれなかつたみたいで、すぐ中退をした。学校の先生とかは相談できる人はほとんどいないという状態で、すぐ高校を中退して出産したという形です。

高校を中退した後、高卒認定、昔で言う大検の資格を取ると、今後の進路を考える上で大事なので、そこを一緒に勉強して、1年ぐらいかけて何とか。8科目受けるのですけれど



ども、全く勉強したことの無いような子が何とか。子供がいるから自分の将来をちゃんと考えたいという気持ちを持っていたので高卒認定は見事合格しました。

私、子育てした経験もないですし、なかなかサポートし切れない部分もあったので、近所の助産師さんを紹介して、子育てのサポートとかをしてもらったのです。そのときに看護師さんが、すごく一生懸命育てているから、看護師とか向いているのではないかという話をしてくれて、彼女は初めて夢ができたという形で、看護の道に進むことに決めて、高卒認定を取った後、看護の勉強を頑張っていたのです。

子供が生まれたとき彼氏には逃げられてしまったのです。その後、彼氏と何とかよりを戻すことができたのですが、彼氏も収入が不安定。子育てがすごく大変な時期にもなっていて、収入がすごく不安定。たくさん稼がなければいけないし、子供も見てるので、保育園に入れたりだとか、熱が出て休むときとか柔軟に対応してくれない会社とかも結構多かったので、彼女は仕事を転々としていたのです。やはりちゃんと稼ぎたいというので、夜の世界に進むことになって、それで彼氏との関係とかもうまうまなくなっていて、また孤立したという形の子がおります。

次は、非行少年が犯罪に巻き込まれたケースです。先ほど言ったとおり、私たち、スポーツ大会とかしていると、エネルギーがあり余って居場所がないヤンキーみたいなのがいっぱい来るのです。友達も連れてきていいからみたいな形で呼ぶと、似たような子たちがわらわら集まってきて、みんな金髪だったり、学校に全然行っていなかったり、やくざからこういう仕事を頼まれているのだけれどもどうしたらいいとか、実はおれ、子供がいるんだみたいな相談を結構この場で受けていたのです。

そんな形で1人の子と出会った。この子は虐待家庭に育って、親からもそうですけれども、お兄ちゃんから死ぬ寸前ぐらいまで殴られたり、ほとんど家に居場所がないような子で、地元では非行少年として結構有名な子でした。

高校を卒業はしたのですが、フリーターで、仕事もなかなか安定しなくて転々として、中学校の先輩とか悪い仲間の先輩とか暴力団関係者とかがいっぱいいるので、目をつけられていて、入らないかという勧誘を日に日に受けていた。彼は高校の先生になりたかったりして意識が結構高かったのですが、そこで何とか踏みとどまっていたのですが、そんな形で、いろいろな仕事を頼まれたりとか、お金のないときはそういう仕事をちょっとやったりとかして、本当にすれすれのところを行ったり来たりしていた子なのです。

特別支援の高校にいたので、特別支援の高校を出ると、高卒の資格ではなくて、専門とか大学に行きたいときに高卒認定の試験を受けなければいけないのですが、高卒認定の試験を受けて、これから大学に進むのを頑張っていて、先生になりたいという目標に向かって頑張っている子もいます。

あと、大学進学の場合は、この子は生活保護世帯で育って、無料学習支援、地域の学習支援につながっていた子なのですが、高校に進学した。ちょうどボランティアで教えてくれていた人が理系で、プログラミングとかにすごく関心を持っていたので、彼

はそういう道に進みたかったのです。大人の協力を得て、ゲーム制作とかを始めて、何とか専門学校に行きたいと、彼はやっとそこまで言うことができた。彼は、1日1食、カロリーメイト1個とかで育ってきているので、パソコンとかも欲しいけれども、もちろん買えなかったりしますし、パソコンとかを私たちが貸しても、家に電波がなくてできなかったりして、ずっと我慢をして過ごしてきた子なのです。なので、彼は、自分が何をやりたかとか、こういうことをやってみたいというのがなかなか出なかった子なのですけれども、私たちがいろいろな機会を提供することで、実はこういうことをやってみたいとか、こういう学校に行ってみたいというふうに彼が自分の口から言ってきたのです。

ただ、彼は自分に自信がなかったり、早く就職して家にお金を入れなければいけないとかいう環境でもあったので、奨学金を借りてまで自分が専門に行っているのかというところをすごく悩んだ。私たちもちゃんとした情報とかを提供していたのですけれども、結局、彼は進学を断念して就職しようとしていたのですが、人とのコミュニケーションもなかなかうまくいかないのが、就活がうまくいかなくて、今、職業訓練校に通ってプログラミングとかを学んで、来年、就職にリベンジするという形になっています。

まとめると、先ほど挙げた事例は、出てきた事例のごく一部だったり、困難な事例だったりとかを説明はしたのですけれども、もちろん、うまくいったケースとか、大学に進学して、今、自分のなりたかった保育士になっている子もいます。大学進学のサポートとかしてきた子も結構いるのですけれども、特に今日は、彼らが抱えている困難のところにフォーカスを当てて話そうかなと思うのです。

高校生ぐらいになると、やはり行政のサポートがちょっと減ってしまうのかなど。徐々に増えてきているところではあるのですけれども、中学生とかに比べると、支援はちょっと減ってしまうのではないかと思います。さらに、高校生とかで行政を頼るといのは結構ハードルが高いことかなど。自分で窓口とかにはなかなか行けなくて、当然、親とかは連れて行ってくれないかたりもするので、そういったことから、私たちが見ていると、行政からすごく遠ざかってしまっている、全く行けなくなっている状況なのかなと思っています。

もう一つは、地域で結構つながりがある子とかも、高校へ入ると行動範囲が広がっていったりしますし、反抗期なのかわからないですけれども、地域の人から離れていってしまうようなことがよくあるなど思っていて、区外の高校に通ったりすると、地元にいる時間も少なくなったりするので、そういったところで地域からもつながりが薄れていくのかなど。

この2つがなくなってしまうと、家庭に居場所がなくて学校にも居場所がない、学校をやめてしまう子とかは支えてくれる人が周りに全くなくて、とにかく友達の間で、どうしたらいいかとか、悩みを相談したり、ネットで調べて、よくわからない情報にひっかかったり、そういった子たちが結構多かった現状にあります。

高校を中退してしまうケースとかも、学校の先生に相談できない子が結構いっぱいいて、

そういった子たちが高校を中退すると、待ち受けているのはフリーターであったり、そこで生活困窮につながっていったりします。そこから妊娠、出産につながるのだとか、夜の世界だとか、暴力団関係につながるのだとか、さまざまな問題に派生していくのかなと思うのです。私たちはまず、その中退を予防する取り組みと、中退した後に、適切な相談相手になったり、つなげたり、そういったところに力を入れてやっていきたいなと思っています。

特に若年妊娠とか出産に関しては、最近、結構つながることが多くて、先週で3件ぐらいつながったのです。知的にちょっとおくらしている子とか、集団で無理やりされて、結局、子供が生まれたというケースだったのですけれども、学校の先生とか友達とかには相談しにくくて、ばれたくないという気持ちがすごく強い子だったのです。そこで、相手は誰かわからないけれども、せつかくできた命だから産みたいということは言うてはいるのですけれども、親の援助も全く受けられないですし、本人もいろいろな制度を理解することとかもすごく難しい。

そういったケースに一気に3件ぐらいつながったのですけれども、1人の子とつながったときに、実は友達も同じタイミングで妊娠しているという形で、その子たちもどこに相談していいかわからないという形でいた、そんなケースもありました。

あとは、妊娠8カ月ぐらいになるまで誰にも言えなかった。親にも言えなくて。ちょっとぽっちゃりした子だったので、周りも気づかなかったのか。さすがに親は気づいているのですけれども、無関心ではあったので。そうやって気づかれないで、本当にぎりぎりになって病院にかかったというケースとかもありました。

あとは、虐待家庭で育って、家出して、彼氏の家とかに居候しているケースが私たちのところにはすごく多い。そういったケースに関して、彼氏と縁が切れた後も家にいざるを得ないケースとかがあって、縁は切れているけれども妊娠してしまうみたいなケースとかもあったり。若年の妊娠・出産に関しては、妊娠することが悪いわけではないのですけれども、1人で見なければいけなかったり、援助がない状態で子供を育てなければいけないというのは結構大変な状況なので、そこに寄り添っていったらいいのかなと思っています。

そういった子供たちがいろいろな課題を抱えている現状を私たちは見てきて、本当に何ができるのかというところは日々考えてはいて、ちょっとずつちょっとずつ取り組みを積み重ねているところですが、その中で見えてきた必要なことというのはこの3つかなと思っています。

まず1つがアウトリーチと多機関連携、2つ目がさまざまな問題への包括的な支援、3つ目が多様な大人の巻き込みというところで、これを一個ずつ説明していけたらと思います。

これは、実際に今、私たちがやっている取り組みを簡略化した図ですけれども、子供たちというのは、見ていると、地域からも遠ざかったり、行政にもつながっていないケースとかも結構多いので、学校からも切れてしまうと、友達だけで相談に乗っていたりするケ

ースが結構多い。私たちは、この一番右下、子供たちのコミュニティに入っていくところを特にやろうとしていて、アウトリーチは、特に子供たちが口コミで相談している中にかに入れるかというところを重視してやっています。

そのときに大事なのが、子供たちが好きなコンテンツ、例えばエネルギーがあり余っている子は、スポーツ大会をやったり、ゲームが好きな子は、ゲームの場をつくったり、そういった形で子供たちの中に入っていく取り組みを私たちはしています。特にコミュニティニュースワーカーというのは、支援者でもなく、いつでも相談できたり、フラットな友達のような関係を築いていくので、年齢が近い親しみやすい人がいると、みんなそういう突っかかりは求めているりするんで、私たちの場に結構来てくれて、実はこういうことに困っているのだということをお話してくれたりしています。なので、特につながりにくい子供たちは、そういった形で、子供たちが好きなコンテンツをつくって一致していくというところが多くあります。

私たちは、そういったアウトリーチ以外にも中高生センターとかと連携をしています。中高生というのは全くつながっていないケースもあるはあるのですが、どこかにつながっているケースももちろんたくさんあるのです。そういったどこかにつながっているケースに関しては、私たちはそこにできる限り足を運んで出向くようにしています。特に中高生の児童館だとかに子供たちは結構たまっている、問題を起こしたりする子とかも結構いるので、そういったところに私たちが入って行って、その中で相談を受けたり、そういったところまでできていけたらいいのかなと。

あとは、行政から紹介されるケースだとか。いろいろつながっている機関があるので、そこで私たちがいろいろな受け皿を持つことで、行政の人たちだとかいろいろな人たちから紹介を受けて、子供たちを支えていける体制をつくっていかなければいけないのかなと思うのです。特に子供たちのいるコミュニティに入っていくアウトリーチのところと、今、高校生が行っているところに足を運ぶ。アウトリーチはその2つで、あとは、いろいろな機関と連携することで、どれかに引っかかっている子供たちを何とかキャッチして支援につなげるということをお話していかなければいけないのかなと思っています。

さまざまな問題への包括的なアプローチのところでは、最初に事例もちょっと交えて話したのですが、高校生問題で抱える問題というのは本当に多岐にわたるなと思っています。教育のこともそうですし、子育てのことだとか、非行だとか、犯罪だとか、そういった幅広い問題を抱えていくのかなと思っています。そのときに、私たちとしても継続して支援をしていくことの大事さ。学習支援につながっている子を高校生のときに私たちが見たり、地域の人と連携して継続して子供たちを見ていく体制をつくりたいといったときに、あらゆる問題に対応できなくてはいけないのかなと思うので、子供たちが陥りやすい課題は何かというところを特定して、そこへのアプローチを一個一個つくっていかなければいけないのかなと思っています。

私たちは最初にいろいろなプロジェクトの事例をお話しさせていただいたのですがけれど

も、こういった目的でやっています。特に高校を中退した子には高卒認定の勉強の場をつくって、進路の相談だとか就職の相談だとか、そこで勉強する中で生活の悩みだったり、そういったところをサポートしています。

若年妊娠・出産のケースに関しては、にんしんSOSの方たちと連携をしたり、私たちがつながったケースをにんしんSOSに相談して、出産するのにどれぐらいお金がかかるかとか、どのくらい大変かとか、そういった体制をつくっていったり。また、私たちが10代ママサロンとかをつくって、食事を提供したり、いろいろな機会をつくったりしています。

非行少年とか犯罪に巻き込まれそうなケースの子たちは、スポーツ大会とかを通じて出会うことが多いので、そういった形で居場所を提供することで、いろいろな大人とつながって相談にひっかかるような取り組みをしています。

ひきこもりのケース、不登校のケースは私たちも見ていることが結構多いのですが、このケースに関しては、高校で引きこもったりすると、見つけるのがすごく難しいかなと思っているので、やはり早い段階から、小学生のうちとか中学のうちからいろいろな人たちと連携する。最近は特にスクールソーシャルワーカーの人たちと連携していることが多いので、そういった人たちに中学生とかを紹介してもらって、中学生のうちから会って行って、高校受験を見届けて、高校へ入った後、なじめるかなじめないかとか、そういったところを寄り添って、なじめなかったときとか、ちょっとつらいことがあったときにいつでも相談に乗れるような体制をつくっています。

あと、大学進学だとか就職をしたい子。やはり奨学金のところでみんな頭を悩ませていて、きょうだいとかがたくさんいて、自分だけがこんないい目を見ていいのかとか、早く家にお金を入れなければとか、働いて奨学金を返せるイメージがないとか、そういったことを話す子がすごく多い。そこで私たちが、その子がどうしたいか。安易に就職に流れてしまうのではなくて、将来のこととかもちゃんと考えて、大学進学をしていったり、自分のやりたいことをかなえていったり、そういったところに寄り添って、学習支援団体の人たちと連携したり。

あと、いろいろな体験学習。私たちにつながる子というのは一般の大学に行くよりは専門とかに行く子が多いのですが、実際にプログラミングをやるといったときに、全くやったことがないのに2～3年通えるのかということ、やはりそこはちょっと難しいのかなと思うので、早い段階からいろいろな経験をして、その適性を見ていったり、どういう学校がいいのかとか、自分はそのプログラミングの中でもこういったところが好きなのか、そういったところを特定していくということに寄り添っていけたらいいのかなと思っています。

資料にはば一っと書いてあるのですが、もちろん私たちだけでこの支援をつくっていくことはできないので、行政の方々ともうちょっと連携して一緒にサポートしていく体制をつくっていかねばいけないし、地域の人たちの協力だとか多くの人たちの協力を得ていかないといけないのかなと思っているので、私たちがつながったケースをできる

限り相談したり、つながったケースで、私たちが見られそうな子は協力して見ていくような体制をこれからよりつくっていったらいいかなと思っています。

最後、大人の巻き込みのところですか。今、就職とか進路につまずく子は結構いっぱいいるので、私たちは早い段階から日常的に働く大人と出会える場とか機会をつくっていきなと思っています。特に日常的というところがすごく重要で、イベントで1回だけ会うとかではなくて、実は一緒にドッジボールをしている人が意外と自分の進みたい会社だったとか、普通に会っている大人が実は有名なゲームクリエイターだったとか、そういう形をつくりたいなと思っています。キャリア教育みたいな形でやると、子供たちはなかなか来ないのですけれども、一緒にゲームをしようとか、一緒に遊ぼうといったところにそういった大人が紛れ込んでいて、その中で、実は僕はこういう仕事をしているんだとかいうような話をしていくことが結構重要かなと思っています。

特に高校生年代というのは、支援されたくないというか、支援されることにすごく敏感なのかなと思っています。支援する場に来られる子もいるのですけれども、来られない子も結構いっぱいいて、そういう子たちには、遊んでいたり、子供たちが日々やっていることの延長線のような形をつかって、そこに私たちとしては支援のエッセンスを入れていたり、こういういろいろな機会を提供できたり、いろいろな経験をしてきた大人をエッセンスとして入れていく。それを徐々に子供たちの日常に溶け込ませていくようなところが必要なのではないのかなと思っていますので、企業の場所をお借りしていろいろな居場所をつくったり、今、連携しているところに企業の人を連れていたり、意外と大人って大したことないんだなと思ってもらえるといいのかなと思っています。そういう形で、すごくきらきらした大人の側面ばかりではなくて、普通の人、でも、ちょっと格好よかったり、ちょっと憧れられたりする、そういう大人がいるところに子供たちは来たがるのかなと思うので、そういう多様な大人を巻き込んでいくところはすごく重要なのではないのかなと思っています。

長々話してしまったのですけれども、全体像としては、いろいろな機関、行政から紹介されるケースだとか、行政の場でつながっている子とか、子供たちとつながることだとか、民間の学習支援団体とか、にんしんSOSだとか、あとは、私たちが子供のいるところに入ったりして子供とつながって、その子たちの抱えている問題だとかニーズに合わせて適切な支援を。私たちとしてはその引き出しをできる限り多く持って、いろいろな人たちと連携して幾つかプロジェクトをつくっていくことがすごく大事ではないかなと思っていますので、本当にいろいろな場を構えて、どんな問題であっても、どんな状況であっても子供たちを支えていける仕組みをつくっていきなと思っています。

特に私たちは地域に入っていく。別にその地域に住んでいるわけでもなく、コミュニティスワーカーは若い人が比較的多いのですけれども、そういった第三者が地域に入っていく。地域の人だからできるということももちろんたくさんあると思うのですけれども、第三者が入って行って地域の人を見つけていたり、地域の交友場所とかと連携して

いたり、企業をそこに巻き込んだりというところをどの地域でもつくれるようなノウハウとかを私たちはため込んで、いろいろなところでこういったモデルをつくっていけるようになりたいなと思っているのです。

特に高校生年代に関しては、いろいろな問題に対処できる場といろいろな機会とかいろいろな大人とつながれる場を、地域の人とか行政の人と連携して各地でつくっていけるようなことをノウハウとして持っていきながら、幾つか事例をつくって、積み重ねていって、広げていっていただけたらいいのかなと思っています。

ここから、実際に活動現場でコミュニティユースワーカーはどんな動きをしているのか、どんな子と出会っているのか、そういったところを話す時間にしようかなと思います。

ちょっと延びてしまったのですが、今日コミュニティユースワーカーの1期生と2期生が来てくれているので、実際の関わりとかを話してもらおうと思います。

ありがとうございました。

○司会 どうもありがとうございました。  
では、続いて中村さん、お願いします。



## 「高校生支援実践報告」

NPO法人PIECESコミュニティユースワーカー 1 期生 中村朋也氏

コミュニティユースワーカー 1 期生の中村と申します。

軽く自己紹介いたしますと、先ほどのスライドで所属が少しばれてしまったのですが、私、行政機関で働いている中でこちらをボランティアとして活動しております。私が主に関わっているところとしては、豊島区の中高生センターで活動しております。

こちらのセンターの概要を軽く述べますと、中高生の児童館という形をイメージしていただければいいかなと思います。こちらで今年の3月、4月ごろから活動しております。なので、まだ半年たっていないぐらいの活動期間です。

こちらに来ている子供たちというのは中高生年代の層の方が多くおります。その中には、大学進学をしたい高校生から、不登校、中退している子、子供がいる子といった形で、いろいろな背景を持った子供たちがいます。

その中で私たちが何をしているかというところでは、先ほど代表や副代表の荒井からもいろいろ説明があったのですが、最初は寄り添うといった形。昨日も活動してきたのですが、ひたすら卓球を一緒にしているという形。今、そんな形で活動しております。

こちらの最終的な目標というかビジョンといたしましては、寄り添って、必要な社会支援につなげるというところをビジョンとしておりますので、最終的にはそういったところにつなげていきたいかなと思います。

なぜこういったところで活動しているかということになりますと、最初の説明にあったとおり、やはり信頼できる他者が必要になっておまして、こちらがアウトリーチすることによって、職員でもない、大人でもない、学校でもない、よくわからない大人が来たぞ、でも、何かこの人、安全だみたいな、そういったところで信頼できる関係をまずつくります。先ほどの資料に逆三角形の取りこぼされた層があったと思うのですが、そういった層の方々もこちらの中高生センターにはおまして、そこをこちらがアウトリーチして、信頼関係をつくることによって必要な支援につなぐことができるのかなと思っております。

具体的な成果は出ていないのですが、日々遊んでいる中で、最近全然眠れていないんだよねとか、そういった言葉をこぼしてくれたり、そういったところから、今、関係構築ができているところかなと思っております。

こういった中高生年代のところは、先ほど荒井からも説明があったとおり、PIECESが非常に強いところとして、いろいろな支援の形を持っているところに対して、今、アウトリーチしている形になります。

あと、ここでの活動のいいところといたしましては、ここの職員の方々といろいろ話す機会があるのですが、その方々も、高校生には寄り添って、何かの課題に気づいて、

そこからつなげるというところが課題だと。寄り添う、気づくというのは、職員もこちらのPIECESもできている。ただ、つなげるといったところが難しいところでして、そのつなげるというところをこのPIECESが担っていけると非常にいいのかなと思っております。個人的には、この豊島区の中高生センターでの活動というのはこれからいい事例になっていくかなということで、私も使命感を持って活動に取り組んでおります。

今、中高生センターの中での活動がメインになっているのですが、ここからつなげるというところで動き出しております、そのつなげるというところを2期生の大畑氏から紹介していただきたいと思います。

話が前後しますが、中高生センターは、バンド練習ができる音楽室であるとか、先ほど卓球をしていたと申し上げたのですけれども、こういった卓球フロア。あと、屋上にバスケットコートとか、多目的室で勉強ができたり、いろいろなところができまして、こういったところで卓球したり、屋上で遊んだり、学習室で一緒に雑談したり、そういったことをしております。

## 「高校生支援実践報告」

NPO法人PIECESコミュニティユースワーカー 2期生 大畑麻衣花氏

私はPIECESのコミュニティユースワーカー 2期生の大畑と申します。私は今、大学3年生で、学校に通いながら、バイトをしながら、空いている時間を調整してPIECESに来て、ふだんこういう活動をしています。

活動の一つが、今、紹介にありました中高生センターでの活動で、ふだんは、そこに来ている中高生の女の子たちと恋バナをしたり、男の子たちに卓球でぼろぼろに負けたり、バンドの話をしたり、普通に自分も利用者なのではないかなと一瞬勘違いしてしまうような関係性を築きながら活動しています。

この中高生センターは、いろいろな背景を持った子どもでもどんな子どもでも集まってこられる場所だと思っていた、だからこそ、社会とのつながりが薄かったり、個別にもうちょっと対応できたらいいのになと思うような背景を持った子がいるのだなと活動をしていて感じました。

その中で、私たちPIECESとして、これからいろいろな企業と連携をしていろいろな場をつくっていこうという活動をしております。そのうちの1つが、今、某外資系アパレル企業とコラボをしています。その企業にワークショップをしに行き、実際に子供の孤立というのはこういうことですか、その社員の方々ができる関わりというのはどういうことでしょうかねみたいなことも一緒に考えて、実際にここの場に見に来ていただく。そういう活動を経て、実際にその企業の方から子ども食堂をやってみようかなという話が現在出ております。今はカップラーメンの販売をしたりしているのですけれども、今後、つくった料理とかを子ども食堂として提供できたらいいなと思っていたり。あとは、アパレル企業ですので店舗を持っているので、そこで職場体験ができればいいねなどという話が出ていたりします。そういうところで、あまり社会とつながっていない子が身近な形で社会とのつながりみたいなものを持っていくとすごくすてきなのかなと思っています。

また、ここで活動していて思うのは、スポーツをしているときの子供たちの顔の輝きがすごく、やった後の達成感を感じたきらきらした笑顔とか、汗だくになっているところとか、そういうところをすごく楽しんでいるのだなと思うので、プロのバスケットチームの方々を呼んで一緒にスポーツ大会を実施できたらすごくおもしろいのかなと考えております。先ほどもお話があったように、スポーツ大会を実施することで、そういうところで友達をつていろいろな層にリーチできたりしていくのではないかなと思っています。

もう一つは、某居酒屋チェーン店とコラボしています。こちらは豊島区の地域全体をもうちょっと盛り上げていきたいなと思っています、地域の1つの拠点をつくらうと考えております。その某居酒屋チェーン店の本社の研修スペースをお借りできることになったので、私たちPIECESとコラボしてそこに居場所をつくらうとしています。実際に豊島区で不登校支援みたいなものをして家庭訪問している、その家庭訪問している子たちをここの居

場所に連れてきてゲーム大会をして、みんなで全力で競い合ったり、あとは、もともとプログラミングのイベントをやっているので、その方たちをここに呼んだり、映像制作をしたり、いろいろなコンテンツを入れています。

中高生センターで活動している中で、やはり集団の中だと対応し切れない、もっと個別で関わっていきたいなと思う子もいるので、そういう子たち。あとは、18歳を超えてしまった子たちをここに呼んで、もっと個別のつながりを深めていけばいいのかなと思っています。その中退してしまった子には高卒認定の場を設けたり、個人個人のニーズに合わせたいろいろなコンテンツを盛り込めたら、もっといいイベントになるのかなと。ちょうど今月の頭に第1回をやったのですけれども、これからこういう活動をどんどんふやしていけたらいいのかなと思っています。

こういうことを盛り込むことで、それぞれの今ある拠点だけではなくて、地域全体のいろいろなつながりを深めて、豊島区の子供たちみんなを見られると今後盛り上がっていく形になっていくのではないかなと。私もふだんの活動はすごく楽しいのですけれども、俯瞰して見ると、すごくおもしろいことになっているなと思ったりしています。

そんな感じです。

○荒井氏 最後まとめると、私たち、団体を立ち上げてまだ1年ぐらいなので、それまでいろいろ個別でやってきていたことはあるのですけれども、まだまだこれからであったり、成果が出ているところ、出していないところ、多々あるとは思っています。これからこういったところの構想を持ちながら、いろいろな人たちと連携をして、高校生年代だとかをしっかり手厚くサポートするような形はつくっていきたいなと思っています。今日豊島区の方とかも来ていらっしゃるんで、一緒に連携して、今、高校生たちに対してどんな形でサポートしていくとか、私たちにできることを最大限やりながら、いろいろな人たちと連携して、子供たちにサポートできるような仕組みをこれからつくっていきたいなと思っています。今、高校生年代の支援がすごく多いのですけれども、足立区とかでは児童相談所だとか子ども家庭センターとかと連携して、人格形成のところとか、年齢の低い子たちと会える場とか、集える場とか、そういった子たちをサポートする場もこれからちょっとふやしていこうと思っています。

ちょうど今、3期生を選考している途中で、来週にはほぼ26人決まるのですけれども、9月から活動を一気に拡大して、いろいろな地域で子供たちに寄り添っていったらいいのかなと思うのです。子供たちに問題があってもなくても、身近にいて、たわいない雑談などの会話とかする中で、たまに相談に乗ったり、たまに力になったり、そういったスタンスで子供たちに寄り添っていける人を私たちが増やしていきたいなと思うのと、いろいろな人たちと手を取り合って、取りこぼされている子、孤立している子を見つけて、いろいろな大人にしっかりつなげて自立の後押しをしていくことがすごく重要なのではないかなと思っているので、いろいろな人のお力をかりながら、いろいろな人と連携しながらこれからしっかり活動を続けていったらいいかなと思っています。

私たちの活動の御紹介は以上になります。ありがとうございました。

○司会 小澤先生、荒井さん、中村さん、大畑さん、どうもありがとうございました。

それでは、ここで10分ほど休憩をとります。休んでいただきながら御質問等をまとめていただければと思っております。再開は3時30分からです。この会場にお集まりください。

(休 憩)

## 質 疑 応 答

○司会 それでは、時間になりましたので、再開させていただきたいと思います。

それでは、これから質疑応答に入りますけれども、今日の発表で、PIECESの活動と申しますか、コンセプトから始まりまして、実際の活動の様子について非常にわかりやすく説明していただきまして、ありがとうございました。今日の参加者の皆さんは全国から集まっていたいておりまして、この活動に大変興味が高いのだなと改めて感じておる次第です。いかがでしょう。皆さんの中から、御確認したいことと申しますとか、意見交換したいことがありましたら、時間を有効に使って、どうぞ御自由にしていただければと思うのですけれども、どなたか最初に口火を切っていただける方はいらっしゃいますか。

よろしく願いいたします。

○参加者1 本日はありがとうございました。ちょっとお聞きしたいのが企業とのコラボ。どういうふうな切り口でどういうふうにして企業に入っていくのか、やり方を少し教えていただければと思います。よろしく願いします。

○荒井氏 ありがとうございます。座ったままですみません。

企業とのつながりに関しては、一応幾つか心がけていることはあるのです。偉そうなことは言えないのですけれども、1人の子がこういうことをやりたいというものを私たちは形にしていきたいと思っているのです。こういう子がいてこういうことをやりたいと言っているのですという形で、1人の子をピックアップしてしゃべることが多くて、こういう場をつくりたいのですとかというよりは、この子がいるから、こういう関わりをしてほしいとか、こういう場所をつくりたいとか、そういった形で、まず最初に、この子のためにというところで伝えているところが1つ。

基本的に企業はほとんど紹介でつながっていて、数で言うと、今、10社ぐらいつながっているのです。その企業は大体が紹介で、今、企業とのつながりを持っている人が何人かいるので、その人たちと日々やりとりしたり、現場に来てもらったり、実際に子供の様子とかを伝えて、そういったつながりを持っている人が適切な企業を紹介してくれるという形で、そんな形で、ほぼ紹介、紹介でつながり始めています。

実際にそういう企業とイベントをやったときに、いろいろな会社に来てもらったり、やったこととかをいろいろなところでしゃべるなどしてつながりをつくったりしているので、大体その3つぐらいかなど。地元の企業とかはこれから当たっていききたいなど思っているので、今は紹介などで、意欲と意思がある、子供のためにちょっとしたことをしたいということを持っている企業の人が多いので、そういった意欲のある人たちが口コミとか紹介でつながっている形かなと思うのです。これからは地域の企業とかに踏み込んで、いろいろな人たちとこういう体制をつくりたいみたいな話とか、こういう形でもっともっと支援していけないかといったことが必要かなと思ってそんな形を心がけてはいます。

回答になっていますでしょうか。

○参加者1 大丈夫です。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。では、ほかにはいかがでしょうか。

○参加者2 どうもありがとうございました。今日お話を伺って、子供たちのコミュニティを直接維持されていることについて、また新人育成に力を入れていらっしゃる点、この2点にとっても感銘を受けたところです。

お伺いしたいのはネットワークづくりです。 3つ質問があります。

1点目は、PIECESの皆さんは行政や関係団体が主催されたネットワーク会議のようなものに参加されたことはありますか。

2つ目は、1つ目の質問がイエスだった場合、実際に参加されてみて、もうちょっとこうしたらよりよくなるのにな、ネットワーク化が進むのではないかなとか、個人的な意見で構いませんので、ぜひ伺わせていただければと思います。

3つ目は、1つ目の質問がノーだった場合、PIECESさんがイメージされている理想のネットワーク会議というのは、どんな人たちの集まりで、どんなことをする会議なのかということをお教えいただければと思います。

どうぞよろしくお願いたします。

○荒井氏 ありがとうございます。

今、会議は、豊島区の会議とかに入ってやられている方たちがいる前でしゃべりにくいこともあるのですけれども、一応お伝えをすると、ネットワーク会議とかには参加させていただいています。今は、豊島区の検討委員、子供に関する施策の検討委員とかもやらせていただいて、学校の先生とか、民生委員さんとか、学者の方とかと情報交換をさせていただいているところに入っております。

自分たちで探しにいける団体というのは、地域でやっている団体など学習支援の団体とか、民間は結構つながりやすいのですけれども、行政の人たちとのつながりというのはなかなか。実際、どんな課がどんなことをやっているとかはまだまだ把握できていないところがあるので、そういった会議に参加させていただくことで行政の中がよくわかったり、その行政の関係者の方たち、特に民生委員さんとか青少年育成何とかの人とかとつながることができたりするので、そういったところは私たちとしてはすごくありがたいなと思っています。

これから学習支援の委員会とかも参加させていただこうと思っているので、より一層情報交換が一層進んでいくのかなと思っています。

要望は特にあれなのですけれども。

ただ会議で顔を合わせているだけではなくて、実際に活動の現場に行ったり、また来てもらったりとか、そういう現場での交流をたくさん増やしていきたいなと。実際、どんな子を見ているとか、それぞれがどんな子を見られるとか、把握したいところがあるので、そういったより一層の交流というところは、私たち、これからできていけたらいいのかなとは思っています。



代表のほうはまた別の事例があるので、そちらをお伝えしようと思います。

○小澤氏 私は、今は入っていないのですけれども、医療職として行政に入っていたときに、要対協とか特別支援ネットワークとかいじめ防止対策委員とか、すごくたくさんあるのですよね。それに入っていました。

例えば要対協とかに入っていたときに思ったのが、実際に要保護から要支援まで入れるとかなり多くの子たちを見ているのですけれども、要対協自体が機能し切れていないことで取りこぼされている子たちがいるのではないかなと思ったのです。ただ、皆さん忙しいので、それだけを機能するのは難しいのだろうと思うのですけれども、要対協に入っている人たちに、もうちょっと民間の人たちが入れたり、ただその子の状況がどうかではなくて、具体的にどうやったらいいとか、今、困難がある子たちをどのように考えて、グッドプラクティスをつくっていくみたいなの、機能するようなものになっていくといいのではないかというのをそのときに感じたというのがあります。

同時に、多分、行政にいたからこそなのですが、個人情報保護の観点で言うと、そんなに簡単に民間に情報を渡して連携しましょうというのはとても難しい中で、その壁をどう越えるかというところは、多分、どの会議でも結構ハードルになっている。その壁をうまく越えながら、多分、いじめのところで上がってきた子と、要対協で上がってきた子と、非行のところで上がってきた子と実は重なっているみたいなのところがあって、どこもばらばらと支援しているのだけれども、もっと一緒にやったほうがうまくいくのではないかとすごく感じていたので、そういった課題となっているところの横串を刺すような、一つ、包括的な会議体だったり、そこに民間とかももっと入って、よりグッドプラクティスをつくっていく、子供たちにとってのいい支援とか、いい支援体制をつくっていくというアジェンダをセットした会議体が1個あると、もしかしたらいいのかなと思ったりしたこともありました。

○司会 実は、平成22年から施行された子ども・若者育成支援推進法では、子ども・若者支援地域協議会が設定されています。私ども、今、それをつくっていかようとしているわけですし、そこに参加していただくと、守秘義務が課されますので、情報のやりとりがうまく伝わるように、壁をなくしていかようという制度になっています。今お話を聞いて、もっとも活動していかなければいけないなという思いを改めて強くしたものであります。

横から入れてしまいましてごめんなさい。

○参加者2 ありがとうございます。

○司会 ほかにはいかがでしょうか。まだ時間はございます。

どうぞ。

○参加者3 ありがとうございます。

警察におきましても、なかなか表面化しにくい児童の被害者ですとか非行少年みたいな対象に対してどのようにアプローチしていくのかというのが課題になっているわけです。皆さんの活動について発表を聞いていると、やはり非行だとか犯罪被害といったところの

接点が出てくるかと思うのですけれども、警察との連携をこうしていますみたいなお話はなかったのです。

そんたくすると、警察というと、権力機関というか法執行機関でありますので、継続的な支援とか被害者の保護とか、そういう部分には余り熱心ではないというふうに受けとめておられるがゆえに、そういうのが出てきているのか。それとも、実際は何か連携しておられて、たまたま今回出てこなかったのか。後者だとは思うのですけれども、具体的に警察と連携してこういうことをしましたとか、こういういいベストプラクティスがありますとか、そういったものがあれば教えていただきたい。

活動を始められてまだ1年ということですので、具体的な要望としてこういうものが出てきているとは言えないかもしれませんが、警察に対する要望等が何かありましたら、せっかくの機会ですので教えていただければと思います。

以上でございます。

○荒井氏 ありがとうございます。

警察の方とは連携したいなと思っています。私たちも困ることが結構いっぱいあって、弁護士の人とかにはちょっと協力いただいているのですけれども、警察の方と連携というのはなかなか想像できなくて、ちょっと怖いのではないかみたいなどころがあるのです。でも、足立区とかでは非行少年はみんな交番の人とかに覚えられているので、一緒につるんでいると私も覚えられたりして、誰々がどうだとかというのを雑談しながら言ったりとか、そういったところはあるのですけれども、オフィシャルな連携とかはこれまで事例はないです。

私たちも、やくざとかとつるんでいる子とかは、つながりはあるのですけれども、例えば、今、そういった人たちに詰め寄られているみたいな電話をもらったときとかは警察に通報するだけみたいな形になってしまっていたので、今後の関わり方のところとかどういう形で連携できるのかということをお話しできたらいいのかなとは思っています。私たちもどんな形で連携できるのかとか、まだイメージがつかめないところはありますし、どんな形でやっていけたらいいとか、その辺も含めて今後お話しさせていただいたりすると、私たちとしてはすごくありがたく思っております。

では、代表のほうから。

○小澤氏 どうやったら連携できるかをぜひ考えていきたいなど。

私、医療にいたときに、非行少年の80%は虐待体験があるというデータがあって、逆境的小児期体験というのがあるのですね。虐待を受けた子とか、DVのある子とか。そういった子というのは、面前DVのところ警察に通報したときにちょっとつながっていたりとかというがあるので、非行のところとかうまく連携するところを一緒につくっていったらうれしいなと思っています。

もう一つは、その前の予防のところ、実は警察にお世話になっている子たちがいて、その時点で連携して予防のスキームをつくれないうのかなと。医療にいたときから、特に今、

警察通告からの虐待相談対応件数がすごく上がっている状況で、警察の人が面前DVとかを通告連携して下さったり、発見しやすくなっているといったところでは、非行とか犯罪に行く前の予防も、もしかしたら実は警察の方が会っているからこそできるのではないかと感じています。

すみません。ちょっと抽象的な話になってしまいました。

以上です。

○司会 よろしいですか。

○参加者3 ありがとうございます。

○司会 非行少年の話がありましたが、PIECESで対応している子たちの中には、茶髪の子、金髪の子も来るということでしたけれども、少年院を経験してしまっている子も含まれているのか、あるいは、その前の段階の少し突っ張り始めた子が多いのか、どちらでしょうか。

○荒井氏 比較的前のほうが多いとは思っています。補導されている子から始まり、ちょっと問題があるし、大変だとかいう子が比較的多いのです。中には、放火してそのまま捕まって、出てきたときにはフォローしたりとかということとかもあるので、私たちとしても、出てきた後に、いろいろな人と一緒にフォローしていく体制だとかは、まだまだとれていないところではあるので、そういったところをうまく連携をとっていかうかなど。

○司会 このコミュニティユースワーカーというのはオリジナルのお考えですよ。

○小澤氏 そうですね。

○司会 そのあたりのところをちょっと詳しく説明していただけないでしょうか。

それから、応募された経緯といいますか、そのあたりも一言、二言教えていただければと思います。

○荒井氏 コミュニティユースワーカーは私たちがつけた名前です。ユースワーカーという取り組みは日本でも行われていて、その年代の子たちだけではないので、ユースワーカーと呼んでいいのか、わからないところがあるのですけれども、特に地域にいたいとか、地域の中でそういったユースワーカーをしていきたいなと思ってはいるので、「コミュニティ」をつけたらいいのではないかと。コミュニティソーシャルワーカーとすごく近いのですけれども、たまたま「コミュニティユースワーカー」を調べたらそういう名前がなかったので、この名前がいいのではないかとこのところをつくったというのがきっかけではあります。

○中村氏 では、私が応募したきっかけをお話しさせていただきます。

ケースワーカーは、先ほども申しましたとおり、1期生8人、2期生8人、これから3期生26名が入るのですけれども、結構いろいろな背景の方がおりまして、私のほうは後で説明するのですけれども、結構原体験があったり。こういった支援をされているボランティアとか、仕事で支援をされている方とかが多いのですけれども、私は興味関心というところが結構強くて。行政機関で副業禁止というところがあって、ただ、心理学とかが好き

だったので、そういうのを学んで、何かできないかなと思ってボランティアサイトを探していたら、PIECESがひっかかって、何かおもしろいなど。学習支援とかは結構いろいろなところにあるのですけれども、日常に寄り添って子どもを見る、子どもを支援するというのがすごく新しくて。かつ、私は1期生なのですけれども、1期生、すごいな、最初じゃんということ、子供のように申しわけないのですけれども、これならなれるかなみたいな感じのところで、ここに関われたらすごく楽しい仕組みづくりと一緒にできるのではないかなというところが私の動機です。ユースワーカーにはいろいろな方がいるのですけれども、相当変わった理由で応募したほうだと思います。

○大畑氏 私は、もともと大学で心理学の勉強をしていて、こういう子供支援みたいなものに興味があったので、大学へ入ってからいろいろなボランティアとかをしていたのですけれども、その中でフェイスブックか何かで見つけて、説明会に行って、ちょっとおもしろそうだなと思って入ったのです。入ってからゼミとかが大学で習った内容と実践が一緒になるところというのはほとんどなくて、ただボランティアはただ電話番号で座っていたりとか、大学の話だと何の話をしているかよくわからないと思ったり、そういうこともあったので、だんだんはまって行って、おもしろくてというのでやっています。

○司会 ありがとうございます。

これは4カ月かけて研修するということなのですかね。

○小澤氏 いえ、6カ月だったのです。

○司会 これから4カ月になって。毎日とかではないですよ。どんなふうなシステムになっているのですか。そこをもうちょっと詳しく。

○荒井氏 月に2回研修があつて、研修は、座学でひたすら知識を詰め込んでも子供たちといい関係が築けるわけではないので、基本的には半分は座学、半分は活動の振り返りをして、何でこういうふうに関わったのかとか、自分が感じた違和感とかがないとか、もうちょっとこういうことができたのではないかというところを、みんな、ひたすら活動の記録を書いて、その時間に振り返りをするという形が月に2回あつて、4カ月間はそれを月に2回ずつやっていく形にしています。そちらが4カ月終わったら、自分たちで振り返りができるような形にしていこうかなと思っているので、できればそんな形。活動は週1日ぐらい。

○司会 高校生も中学生も問題性の幅が広い子供たちが来ると思います。学校の問題から始まって、ほかの問題もある。そういう子供たちが自分はこんな問題がありますと来るわけではないですね。実際、その子供たちと話をしてみても、問題の広さとか、非常に困難な状況がわかるのであり、そうすると、コミュニティユースワーカーは、子供たちとすごく身近な存在にならないといけないと思っているし、すごく慎重にいかないといけないと思っています。どんな問題が出てくるかもわからないとかあります。普通に話していても、今度は警戒するかもしれないし、コミュニティユースワーカーは子供たちに対して、非常に難しいアプローチといたしますか、あらわれ方をしなければいけないと思うのですけれど

も、そのあたり、ちょっと工夫されたりしているところが少しあれば、経験を通して、こういう感じだなとかいうのがあったら教えていただければと思います。

○中村氏 私は、基本的にフラットに接するように心がけていまして、こちらが来ましたみたいな感じを出すと、相手の子供たちも構えてしまうところがあるので。先ほどの豊島区の中高生センターというのは金曜日の夜と日曜日に活動していて、私は大体毎回行っているのですけれども、仕事場が新宿なので、金曜日の夜、仕事終わりにそこから行くと7時50分ぐらいに着くのですね。館の閉館が8時なのです。なので、今日職員の方がいらっしゃるのであれですけれども、7時50分の男と言われていまして、子供たちにも、おまえ何しに来たんだよと言われるのです。そこでボランティアに来たんだよみたいなスタンスではなくて、ちょっと遊びに来ちゃったみたいな。何しに来たんだみたいな、子供たちが会話するようなちょっとふざけた会話のトーンを心がけて、土日は結構時間がとれて関わられるので、今日早いな、どうしたのみたいに言われる。暇だしみたいな、そんな感じの、高校生たちが会話するようなトーンでこちらも会話することを心がけています。

○大畑氏 私も、結構フラット。心がけているというよりは、話しているうちに自然と。自分も同世代なのですけれども、自分も同じ立場なのではないかという気持ちになって、友達と話しているぐらいの気持ちで話せていて、何かあったときにはゼミとか多くの人とかに言えば何とかなるだろうなと思っている節があるので、そういう不安は余り気にせず、ずかずかと関わっています。

○司会 ありがとうございます。

そろそろお時間が近づいていますが、ぜひ聞いておきたいことがありましたら、御質問をあと1つぐらいと思いますが、いかがでしょうか。

お願いします。

○参加者4 ありがとうございます。

お伺いしたいのですけれども、子供たちの保護者との関係をどうされているのかということです。進学とかされる場合は、お金の問題とか、その子供の保護者を巻き込んだ対策というのが重要ななと思うのですけれども、その辺、苦労されている点、工夫されている点があれば教えていただきたい。

もう一つ教えていただきたいのは、コミュニティユースワーカーの募集方法。どういう効果的な広報があるのか教えてもらえればと思います。

この2点、よろしくお願いします。

○荒井氏 保護者に関しては、基本的にユースワーカーが保護者とやりとりするというよりは、学費のことだとか、親が出てこなければいけないときは専門家が入るようにはしているので、そこは専門家の人たちの仕事かなと思っています。内部に専門職、代表も児童精神科医ですし、メンバーのもう一人は、社会福祉士で、今、スクールソーシャルワーカーを自分の区でやったりしているので、そういった人とかにお願いして対応してもらっているというのが実情です。

まれにですけれども、御家族と仲よくなったりして、よく御飯とか食べさせてもらったりだとか。イレギュラーなケースなのですけれども、子供と仲よくなると、子供が家に帰って荒井ちゃんとか言っているのかわからないのですけれども、親にも認知されるようになって、お世話になっているから家に呼びなさいみたいな形で御飯を食べさせてもらったりとか、そういう形で親とも仲よくなって、その親の周りの人たちが、うちの子、困っているから見てほしい、みたいな感じで広がっていったりとかいうのはイレギュラーなケースとしてあります。

リスクとかもあるので、家庭への踏み込みというのはちょっと慎重に。コミュニティーワーカーというのは、子供たちの生活の中でもうちょっと友達のような感じで接するということなので、余り踏み込み過ぎないようにしたいなと思っているので、そういったところは専門家にお聞きしてやっているという形になっています。

募集方法は基本的にフェイスブック。私たちは基本的にはSNSだけで広報していて、1期生で募集して60人応募が来て、2期生も60人ぐらい来て、今回、3期生は80人ぐらいの応募が来て、全部SNSとかで拡散して、あと、ボランティアの掲示板とかですね。それで一応やってはいます。特に工夫していることはそんなに多くはないのですけれども、立ち上げるとメディアに取り上げられたりだとかいうことが結構多かったり、あと、やりたい人、とにかく原体験を持っている人とか興味ある人とかが最近すごく増えてきているのかなと思うので、そういった人たちが見るメディアとかにはよく取り上げられてはいるので、そういった形で、そういった層にちゃんと一致するような形で。特に戦略とかを持っているわけではないのですけれども、そういった人たちと結構つながりが多いので、そういった層に情報が届くようにはなっているのです、基本的にはSNSがメインにはなっています。

あまり工夫していないのですけれども、よろしいですか。

○司会 ありがとうございます。

## 閉 会

○司会 そろそろお時間がやっまいりました。最後に、代表からメッセージがありましたらいただきたいと思います。

○小澤氏

今日はありがとうございました。私たちはコミュニティユースワーカーというのを育成しているのですが、子供たちというのは、その地域で生きているだけではなくて、学校での顔があったり、警察にお世話になっているような顔があったり、行政機関にお世話になっているような顔があったり、いろいろな顔を持っているのです。そこがばらばらになってしまうと、子供たちがまさに孤立しやすい状況になるのではないかと考えています。なので、コミュニティユースワーカーだけでも片手落ちで、そこに専門家との連携があったり、警察の方との連携があったり、行政機関の方との連携があったり、地域とか企業の連携があって初めて子供たちの健康的な成長をみんなでサポートできるのではないかと考えています。

私たち、ちょうど1年たって、これからより大きい連携をして仕組みをつくっていきたいと思っていますので、ぜひ皆さんと一緒にそういった新しい連携の体制をつくっていただけると嬉しいです。本当にありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。

それでは、以上をもちまして、平成29年度の1回目の「青少年問題調査研究会」を終了させていただきます。

参加者の皆様、講師の皆様、本日はありがとうございました。講師の方にもう一度拍手をお願いいたします。

本日はどうもお疲れさまでした。ありがとうございました。